



釜石鵜住居復興スタジアムオープニングDAY

——『釜石でワールドカップを！』

釜石を愛する方々の思いが詰まった「釜石鵜住居復興スタジアム」の記念すべき柿落しの日、首都大から52名がボランティアとして参加しました。

首都大学東京ボランティアセンターでは、「NPO法人スクラム釜石」と連携し、釜石ラグビー応援プロジェクトとして「ラグビーを通した震災復興」に取り組んでいます。今回はその一環として、「釜石鵜住居復興スタジアムオープニングDAYボランティアツアー」を実施いたしました。

<1日目>

朝7：00に東京を出発。

今回のボランティアツアーには、ラグビーに全く触れたことのない学生、東北に足を踏み入れたことのない学生など、様々な学生が参加していました。バスの車内では、ラグビー部による「ラグビーミニ講座」が開かれ、基本的なルールや魅力、観戦のコツなどについて、教えてもらいました。さらに、先日行われた「釜石ラグビー応援プロジェクト 第1回ワークショップ」の参加者から、RWC2019組織委員会の寺廻健太さんからの話や「釜石8.19に向けて何ができるのか」について、自分たちが話し合った内容の説明があり、全体で情報を共有しました。



▲ラグビー部による「ラグビーミニ講座」の様子

16：00に「鉄と魚とラグビーの街」岩手県釜石市に到着。

初日の目的地である宝来館を訪問させていただきました。宝来館の目の前には、陽の光を反射させながら輝く綺麗な海が広がっています。震

災時に多くの人の命を奪ったことを微塵も感じさせないほど穏やかな海でした。

連携団体である「スクラム釜石」の早川弘治さんからは、震災当時の被害や復旧・復興の取組について教えていただきました。

宝来館の女将である岩崎昭子さんからは、東日本大震災で受けた鵜住居地区の被害の大きさ、そこからどのような思いで復興に向けて取り組んできたのかといったお話をお聞きました。岩崎さん自身も一度は避難したものの、近所の方を心配して山を下り、津波に呑み込まれ、避難路の斜面にしがみ付いて助け出されたという経験をされました。「いただいた命だから」とおっしゃっていましたが、その後、旅館の再生や釜石のまちづくり、ラグビーワールドカップの誘致活動に奮闘してこられました。特に、ラグビーワールドカップが釜石で開催されることについては、希望にあふれた素敵な笑顔で話されており、その姿からは、言葉で表せないほどの喜びや熱い思いが伝わってきます。

——「釜石の人は、ラグビーを愛しています」

岩崎さんが何度も話すその一言が、印象的でした。



▲宝来館の岩崎さんから震災時のお話をお聞きました。

翌日のオープニングDAYでの試合を控える「ヤマハ発動機ジュビロ」の選手・チームスタッフや福島県広野町から釜石まで約300kmの道のりを自転車で駆け抜けてきた「スクラム東北ライド」の方々を拍手や声援でお迎えした後、私たちは宿泊地である大船渡へ向かいました。

首都大学東京×スクラム釜石
釜石ラグビー2019
応援プロジェクト

釜石鵜住居復興スタジアム
オープニングDAY
「ボランティアツアー」

報告

2018/08/18-20



宝来館の目の前に広がる海

震災当時、街からいろいろなものを奪った海は、その面影を微塵も見せないほど美しく佇んでいました。今では、海の周りが綺麗に整備されています。目の前の光景からは想像することができない震災当時の様子をスクラム釜石の早川さんに教えていただきました。



スクラム東北ライドの参加者を迎える様子

福島県広野町から岩手県釜石市まで、約300kmの道のりの長さもそうですが、距離以上に「山間部の高低差がきつかった」と話していました。



「スクラム東北ライド」の参加者、「ヤマハ発動機ジュビロ」の選手・スタッフ、「宝来館」の方々との集合写真です。

<2日目>

いよいよ『釜石鵜住居復興スタジアムオープニングDAY』の当日です。

7:30に会場でボランティア全体の打ち合わせをした後、役割ごとに準備が始まりました。今回、首都大生は、入場口での「チケットもぎり」「資料配布」「記念Tシャツの引換」、会場内や各駐車場で「案内・誘導」、スタジアム外周での「エア遊具サポート」、舞台袖での「音響機材運び」を行いました。

学生たちは、それぞれの活動の中でスタジアムを訪れた方々と接しました。スタジアムを埋め尽くすほど集まった地域の方々、富来旗（大漁旗）を力いっぱい振って地元チームの「釜石シーウェイブス」を応援する方々、チケットを持ってなくてもスタジアムだけを見に来た方々、様々なカタチでイベントを盛り上げている現地の中高生、「知り合いに配るんだ！」とキーホルダーやタオルなどの公式グッズをたくさん購入している方、会場の至る所で釜石の復興への強い思いを感じました。

宝来館の女将である岩崎さんの「釜石の人は、ラグビーを愛しています」という言葉通り、いや、それ以上の熱がありました。

活動終了後の振り返りでは、学生たちから「こんなに盛り上がるんだと驚いた」「釜石の人にとってラグビーが、それ以外の何にも変えられないも

のになっていた。ラグビーをしている身としてうらやましく感じた」「来年、ラグビーワールドカップが日本で開催されることで、東北が頑張っていることを発信できるチャンスだと思った」などの感想が挙がりました。何より、参加者全員が釜石鵜住居復興スタジアムの希望に満ちた特別な雰囲気を感じたようです。



▲活動後には、全体で振り返りをしました

「釜石ラグビー応援プロジェクト」では、これからも「ラグビーを通じた復興支援」に取り組み、学生の思いやアイデアをカタチにしていきたいと思います。

今回のボランティアツアーにご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。



釜石鵜住居復興スタジアム



当日の朝に行われたボランティアの全体打ち合わせにて、学生一人ひとりの役割や活動内容が決まりました。首都大生は、各役割ごとに動きを確認し合い、臨機応変に行動していました。

～釜石鵜住居復興スタジアムの各所で活躍する学生ボランティア～



入場口でのチケットもぎり担当の様子



入場口での資料配布担当の様子



物販テントでの記念Tシャツ交換担当の様子



スタジアム外周でのエア遊具サポート担当の様子



入場口付近で記念TシャツをPRしている様子



スタジアムには、大勢の方々が訪れました

ボランティア奮闘

8月20日付の『岩手日報』朝刊に、「釜石鵜住居復興スタジアムオープニングDAY」の特集記事があり、その中に首都大生が活動する様子を写した写真が掲載されました。



首都大学東京ボランティアセンター
公式SNSで活動の様子を発信中！！

◆公式Twitter

首都大学東京ボランティアセンター
(@tmu_volunteer)

◆公式Facebook

首都大学東京ボランティアセンター